

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校としての点検・評価が組織的に行われ、PDCAサイクルが効果的に機能している実践事例
-------	---

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

鳥取県伯耆町

○学校名

伯耆町立二部小学校

○学校のURL

<http://cmsweb1.torikyo.ed.jp/nibu-e/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年（3・4年は複式）各1学級、【合計】5学級

○児童生徒数

【全体児童数】25人（平成25年11月25日現在）

（内訳：1年生4人、2年生5人、3・4年生9人、5年生6人、6年生1人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

○人間尊重と郷土愛を基調として、心身ともに健康で人間性豊かな心をもった実践力のある子どもの育成

【人権教育に関する目標】

○自己実現に向け、本来持っている能力を発揮し、自ら学び続けようとする態度の育成を図る。

○人権や人権問題について考えを深め、人権尊重の社会をつくろうとする意欲と態度の育成を図る。

○自尊感情を育て、多様な人々と豊かにつながり、共に生きようとする態度の育成を図る。

○人権教育にかかる取組の全体概要

「授業が変わる・学びが変わる」を合い言葉に、教師の指導力の向上を目指して作成した「二部小授業開発のための提言」を共通実践し、その中で明らかとなった成果と課題を随時反映させ、更新し続けながら授業改革に取り組んでいる。

【研究主題】

○友達とともに学び合い、自分のよさに気づき、考えを深め広げようとする子供の育成～思考力・判断力・表現力を高める言語活動の充実～

3. 特色ある実践事例の内容

◆「二部小授業開発のための提言」に基づく授業改革（P D C Aサイクルの確立）

○取組のねらい、目的

目指す子供の姿を以下のように設定し、その具現化に向けて「二部小授業開発のための提言」を作成し、国語科を先導教科として人権教育の視点から授業改革に取り組むこととした。

《自分の課題解決に向かって夢中（没入・熟考）で学習する姿》

- ①知的好奇心から学びの意欲へつながる姿
- ②習得・活用の力を身に付けた姿
- ③学び方を身に付けた姿
- ④自尊感情を持ち前向きな姿

○取組を始めたきっかけ

本校児童は、素直で与えられた課題に真面目に取り組むことができ、決められたことを守ってやり遂げようとするすばらしさがある。その反面、小規模の集団ということもあり、主体的に行動したり、多様な人々とコミュニケーションをとったりすることに消極的な児童も少なくない。そこで、自分の思いを豊かに表現するための語彙の獲得、自分の大切さとともに他の人の大切さを認められる人権感覚の育成に取り組むこととした。

○取組の内容

「二部小授業開発のための提言」（H25.9.30改定）

A 育てたい力を明確にした単元を貫く言語活動

1 一次から三次まで子供の考えも位置づけた一貫性のある単元構想を作る。表現に開く単元構成にする。

（1単位時間の学習計画の可視化）

2 具体的な活動を明示した目当てを作る。子供がこの時間（及び単元）に何を学んだらよいか分かる目当てにする。

3 子供自身が学びの足跡となるノートづくりをする。

4 単元の中に教材を2つ以上入れる。

5 学習の後半に、学習の成果の発表を学級の外に開く。

6 子供自ら生み出した話す聞くを可視化する。

B 多様な相手とのペア的学習

様々な相手や様々な考え（学級の友だち、学校の友達、他校の友達、地域の方、図書や資料、先輩のノート等の学習財）との出会いを通して、自分の考え等を深め広げようとする子供を育てる。

C 豊かな読書生活につなげる環境づくり



国語科の「ゆうすげ村の小さな旅館」の学習を貫く活動として『進学年によく分かるあらすじ紙芝居を発表しよう』を設定し、最後までやりとげました。



国語科の「広告と説明書を読みくらべよう」の学習で、以前まで福岡分校として使われていた校舎を食堂にしている「農家食堂 上代学校」を取材し、広告と説明書を作って届けました。地域で活躍される方々の思いを知り、学習発表会でもその思いを伝えました。



『すらすら音読』
～1年生と6年生が2人で音読を～

- ・豊かな読書活動を支える環境づくり（校内の書籍等の工夫、読書に関する掲示環境）
- ・学校図書館と連携した各教室の読書環境づくり（読書テーマパークコーナー、学習財コーナー）



D 二部小学びの基礎づくり

学びの自立に向けて1単位時間のあるべき子供の姿（授業規律）を具体的に示し、共通実践できるようにする。

①名札を胸につける。
②(名字)で「〇〇さん」
③「はい」の返事
④元気なあいさつ

ふでばこ

机の上おき方

●〇分スタート

えんぴつの持ち方

姿勢

手の挙げ方

→●単語でなく言葉で語尾まで話す。(文章で話す。わからないも含む。)

○目的に応じた場の設定(教師の働きかけ → 児童の要求も出てくる)
原理原則: まなこが合う・なんのために何を話し合うか全員理解している(必要性)・司会が誰でもできる・記録が誰でもできる・役割分担ができる

→●問いかけや友だちの発言に黙っていないで反応する。(表情で、言葉で・・・など)

○問題解決過程
○方法知・観察、分類、直感
比較(対比、類比、推論)

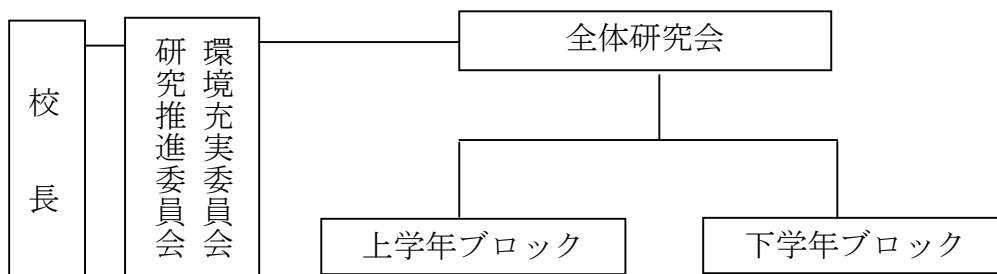
→●無表情や否定語、肯定語について子どもに教える。

○元気の出る言葉。いい言葉みつけ。発言して子どもは力をつける。どの子にも光をあてること。肯定語は聞いていても気持ちよかったと教えること。
○無表情や否定語。自分の言葉や表情(態度)でまわりの人の気持ちを下げたことを教えること。肯定語と否定語。二極化の子ども達。否定の生活に慣れている子と肯定の生活に慣れている子がいる。否定語や無表情は、まわりの人の気持ちが重たくなることを教える。

●学習の振り返り

「はじめは、・・・だったけど、今は・・・に気づいた。」
 「意味がやっとわかった。」
 「・・・が深まった。」
 「・・・が広がった。」
 「〇〇さんの意見や先生の助言を参考に・・・してみた。すると・・・のところまでできた。でも、・・・のところについては、もう少し・・・だから、そのために、・・・をする。」

○取組の主体や実施体制



○取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫

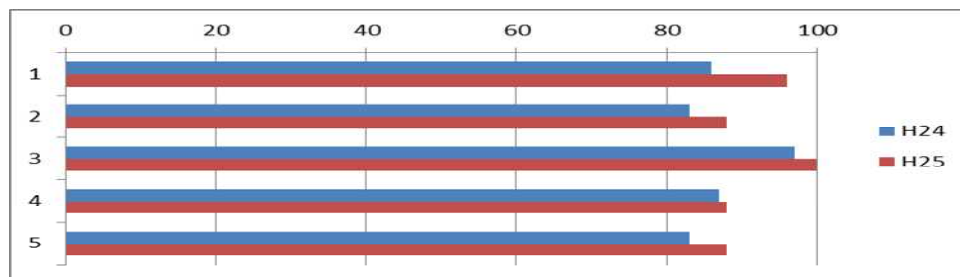
小規模の集団であるため、意見の多様性をどう確保するかが課題となりがちである。教室を区切り異なる資料で別々に考えた後で意見交換する、級外の職員を授業に招くなど工夫しながら取り組んでいる。



4. 実践事例の実績、実施による効果

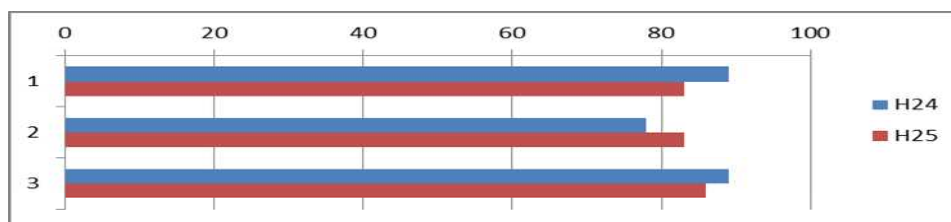
【子供の成長アンケート】(H24→H25)

- 1 発表・発言ができた (86%→96%)
- 2 国語は好き (83%→88%)
- 3 国語はよく分かる (97%→100%)
- 4 家庭学習をする習慣がついている (87%→88%)
- 5 自分にはよいところがある (83%→88%)



【教員自己評価】(H24→H25)

- 1 目当てを表現に開くものになっている (89%→83%)
- 2 教材のキーワードを明確にし話を成立させている (78%→83%)
- 3 一貫性のある単元構想をしている (89%→86%)



5. 実践事例についての評価

【成果】

- 単元を貫く言語活動を位置づけた授業の流れが定着した。「この学習の発表は誰に聞いてもらえるの?」と嬉しそうに聞きに来る児童の姿が見られるようになるなど、児童が相手意識を持ちながら主体的に取り組むようになった。
- 児童集会等で自信を持って発言する児童が大幅に増えた。「〇〇さんの話を聞いて私も◇◇を思い出した」「私は△△だったけど□□さんの話を聞いて今度それをしてみたいと思った」等、自分の感じたことをありのまま表現するようになった。
- 読書数が飛躍的に伸びた(一人年間平均 H21: 81冊→H24: 119冊)。学習中の図書や図書館の活用が児童にとって日常的なものとなってきた。
- 「二部小・単元開発のプロセス」「二部小『言語活動』アイデア貯金箱」「二部小学びの基礎づくり」等、「二部小授業開発のための提言」を効果的に機能させるツールを開発・更新することができた。

【課題】

- 先導教科としての国語科の授業改革の成果を、日常生活や行事、他教科での学習とつなぎ、共通実践していく必要がある。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

伯耆町立二部小学校

人権教育の視点から授業改革に取り組んだ事例である。

教師の指導力向上を目指して作成した「二部小授業開発のための提言」を共通して実践、実践の過程で明らかになった成果と課題を随時授業に反映させ、学習計画等を更新し続けながら、授業改革に取り組んでいる。

国語科を各学年共通の先導教科としているが、教科の位置付けから、上記授業改革の中でPDCAサイクルを確立するという方針に沿った、妥当な選択と認められる。

取組の内容は、「育てたい力を明確にした単元を貫く言語活動」を基に、「多様な相手とのペア的学習」という手法等を用い、「豊かな読書生活につなげる環境づくり」に工夫しつつ、「二部小学びの基礎づくり」という目的へと結びつくものとなっている。

小規模校の課題解決の工夫、効果測定の方法を含め、PDCAを考える際の参考となる。